



トレンドに 背を向けて

アメリカの発明家バックミンスター・フラーは、1930～1940年代に先進的なアイデアを次々と生み出し、風変わりな異端児とみなされることもあった。彼の思いつきがすべて商業的に成功したわけではないが、その新しい発想は、当時の人々を大いに刺激した。まさに時代の先を行く人物だったのだ。

文 ジョナサン・グランシー

リチャード・バックミンスター・フラーは型破りな人物だ。建築家やデザイナーであると同時に、エコロジストでもあり、また30冊以上の本の著者であり、モダンニズムの思想家でもあった。交通手段や住宅といった生活環境の問題はデザインによって解決できると信じ、生涯にわたって多彩な分野で活躍。「全人類のために機能する世界」をつくり出そうと考えた。マサチューセッツ州ミルトン生まれのフラーは、若い頃にカナダの紡績工場で働き、食肉加工産業で汗を流し、米国海軍で墜落機のクルーを救助する救助艇を考案している。しかし、4歳の娘アレクサンドラをインフルエンザで亡くしてから酒におぼれ、量産型の低コスト住宅の計画も頓挫する。32歳で一文無しとなった失意のフラーに、希望の光は全く見えなかった。しかし、フラーはこの絶望の淵から這い上がり、山あり谷ありのキャリアのなかで、空を飛ぶクルマ、工場で量産する住宅、丈夫で軽量な独自のドーム型建築ジオデシック・ドームなど、新しい発明を次々と生

み出していく。いずれの作品も、フラーの印象深いフリーズで彩られていた。「宇宙船地球号」という用語もフラーが編み出したもので、人類の存亡がかかった貴重な乗り物を意味している。人類が栄え、地球が存続するためには、「最小で最大を成す」ことが要であり、必要に応じて原点に立ち戻るべきだ、とフラーは主張する。そんなフラーが設計したクルマは、市場に出回っている従来のものとは全く異なっていた。1933年に発表されたダイマクシオン・カーは、フォルクスワーゲンのキャンパーバンと（マイパッハの）小型ツェッペリンを掛け合わせたようなデザインだったが、これはこのシリーズの「助走段階」に過ぎず、いずれはジェットプロペラ付きのバージョンが空に舞い上がると話していた。フラーは愛する次女アレグラに、このダイマクシオン・カーのことを「スームモービル」という言葉で説明している。このクルマは「道路から好きな時に離陸して、鳥のように巧みに飛び回り、車の流れに

戻ることができる」というものだった。ダイマクシオン・カーは究極的に、軽量でフル装備のダイマクシオン・ハウスを空輸し、どこでも住みたい場所まで飛んで行けるという筋書きになっていた。ここには、夢のような生活や自由があり、先端技術に裏打ちされた幸福の追求があったのだ。

「ダイマクシオン」は、「dynamic」[maximum]「tension」の3つの言葉を組み合わせたものだ。全長約6メートルのダイマクシオン・カーは、時速120マイルを出すことができるとフラワーは主張し、実際に自分で25万マイルもの距離を何の問題もなく走行したと豪語した。さらに、米国の大手自動車メーカーとの取引が進行中で、いずれ25万台もの12人乗り3輪ダイマクシオン・カーが高速道路を走り交うだろう、と言い放った。

フラワーの豊穣な想像力は、ともすれば行き過ぎてしまうこともままあった。息を呑むような外観であるとはいえ、ダイマクシオン・カーが、少々手に余る代物であることは、テネシー州ナッシュビルでレイン自動車博物館を創設したジェフ・レインや、イギリスの建築家ノーマン・フォスターも当初から気づいていた。実際に製作されたのは何万台ではなく、試作車の3台だけだったのも驚くには及ばない。ふたりはダイマクシオン・カーのレプリカ製作を依頼したことがあり、フォードの85馬力フラットヘッドエンジンには、分速約3.2キロのスピードでクルマを推進するパワーはないことを十分に承知している。また、超低速ギアで動く単一の後輪は融通が利かず、安全性の確保が難しいため、高速のモーター回転など到底叶わないことも知っている。

大恐慌のさなかにこのような大胆なクルマを発売することは、まるで勝算のない話だった。フラワーが報道陣に語った量産モデルの価格は、なんと200ドル、または1933年型フォード・モ

PHOTOGRAPHS: JEFF GOLDBERG/ESTO GREGORY GIBSON THE ESTATE OF BUCKMINSTER FULLER CARL SOLWAY GALLERY

複製の製作を2010年に実現させた。トネリコ材のフレームには手で加工したアルミニウムを使い、ボディの色は鮮やかなレーシンググリーン、ルーフはホワイトだ。

ドーム（屋外では世界最大）とガラス張りのモダニズム建築を組み合わせたものだった。【当ページ】ノーマン・フォスターは「ダイマクシオン・カー」の

【前見開きページ】オハイオ州の米国金属学会の世界本部ビルは、1959年に建築家ジョン・テレンス・ケリーが最初に建設したが、これはフラワーのジオデシック・

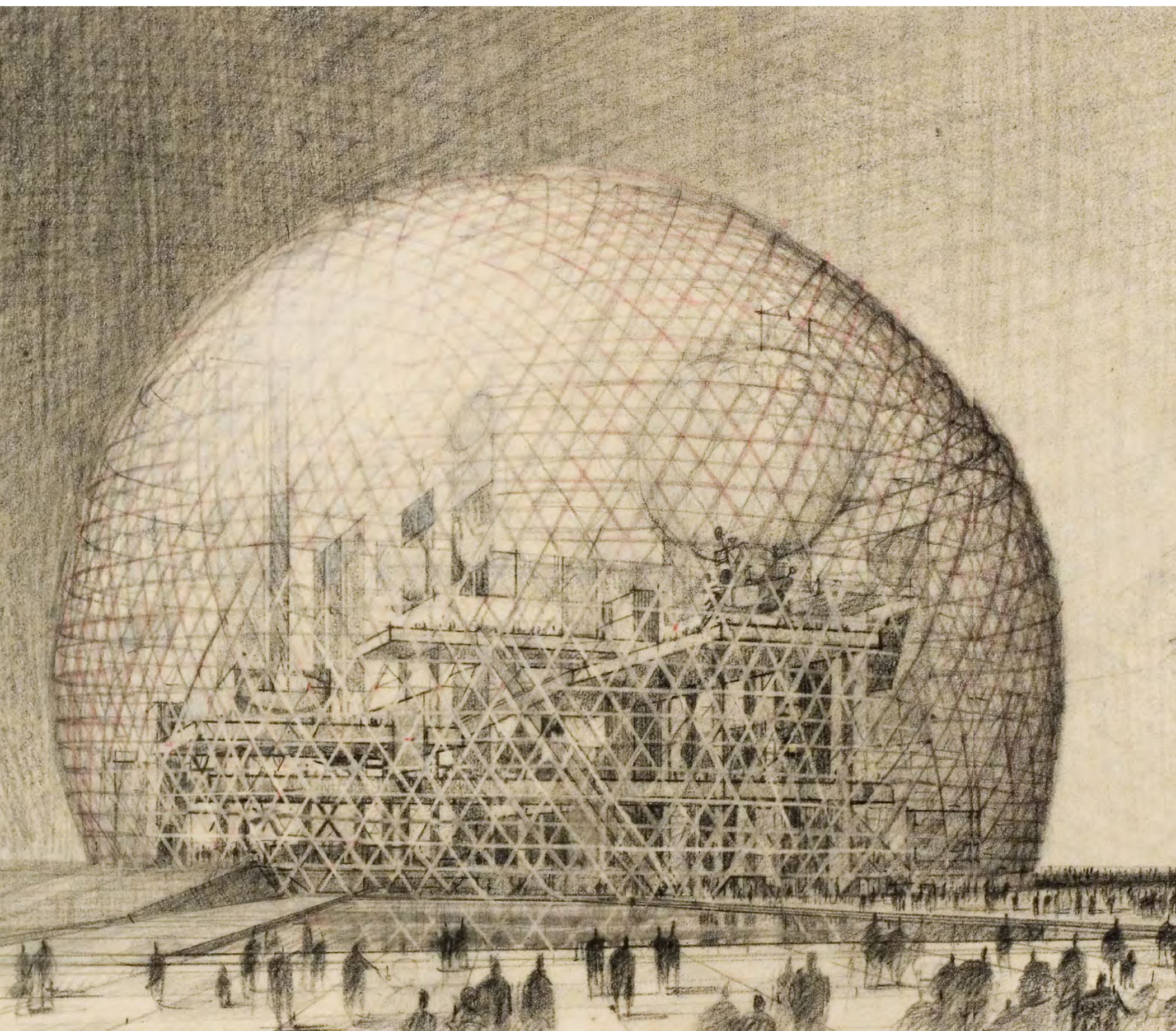
デルBの半値以下、とのことで、冗談にもならなかった。2008年にこのダイマクシオン・カーのレプリカの製作を決意したノーマン・フォスターだが、かなりコストが嵩むことは分かっていた。イギリス、イーストサセックス州にある、レスカーのレストアで名高いクロスウェイト&ガーディナーのフィル・キングは、フラワーの試作車3台中、唯一現存する1台を調べるために、米国ネバダ州のリノに飛んだ。キングは「今までに見たこともないようなものでした。構造を理解するためには、これまでにクルマについて学んだことをいったんすべて忘れる必要があります」と私に語ってくれた。

クルマの重量に加え、そのデザインには妥協点が多く、とても空を飛べるようなものではなかった。しかしフラワーは、発明に対する非難を一蹴する。少なくとも、多くを学ぶ機会が得られたことが重要なのだ、と彼は言う。「当時は実験の時であり、自動車産業はシリコンバレーのように魅惑的なビジネスだった」というわけだ。

ダイマクシオン・カー同様、ダイマクシオン・ハウスも、豪快な失敗だった。これは1920年代後半から量産目的で開発・設計が行われたプロトタイプで、独創的に組み込まれた低エネルギーのキッチンとバスルームがあり、自然な換気と冷却を巧みに利用している。低コストの部品キットとして分解して配送され、現地で組み立てられるものだった。1942年に米国陸軍通信隊は、軍用用のベリックモデルであるダイマクシオン展開ユニットを200セット発注しており、この未来型ハウスには明るい未来があるように思われたが、結局のところ、鉄鋼不足を理由に追加の注文はキャンセルされることになってしまった。

12年後、フラワーの設計したジオデシック・ドームの搬入と輸送のために米国海兵隊のヘリコプ





ターが使われた。木材とプラスチックで構成され、後にマグネシウムも使用されるこのドームは、兵士が135分で組み立てられるように設計され、海兵隊が目的とする場所にどこでも移動することができた。

ジオデシック・ドームとして知られる、最も初期のものは、カルツァイス社の技師ヴァルター・バウアースフェルトが製作したもので、1926年にドイツのイエーナにある同社工場の屋上に設置された。このドームにはプラネタリウムのプロジェクトが収められた。フラーはアーティストのケネス・スネルトンと協力し、ドームの数学的特質を解明し、二十面体を連結する高強度の軽量グリッド構造から、これをつくる方法を編み出したのだ。そして、このグリッドはガラス、プラスチック、布地、アルミニウムなどの保護シートで覆われることになった。

フラーのドームは、気象観測所、早期警戒レーダー基地、兵站倉庫、極地探検基地として、多く採用された。また1960年代には、壮観なふたつの展示パビリオンという形でも足跡を残した。1964年のニューヨーク万国博覧会と1967年のモントリオール万国博覧会だ。モントリオールのドームは若きノーマン・フォスターの目を捕らえ、フォスターはフラーが1983年に亡くなるまで、ロンドンのオフィスで彼にコンサルティングを依頼していた。

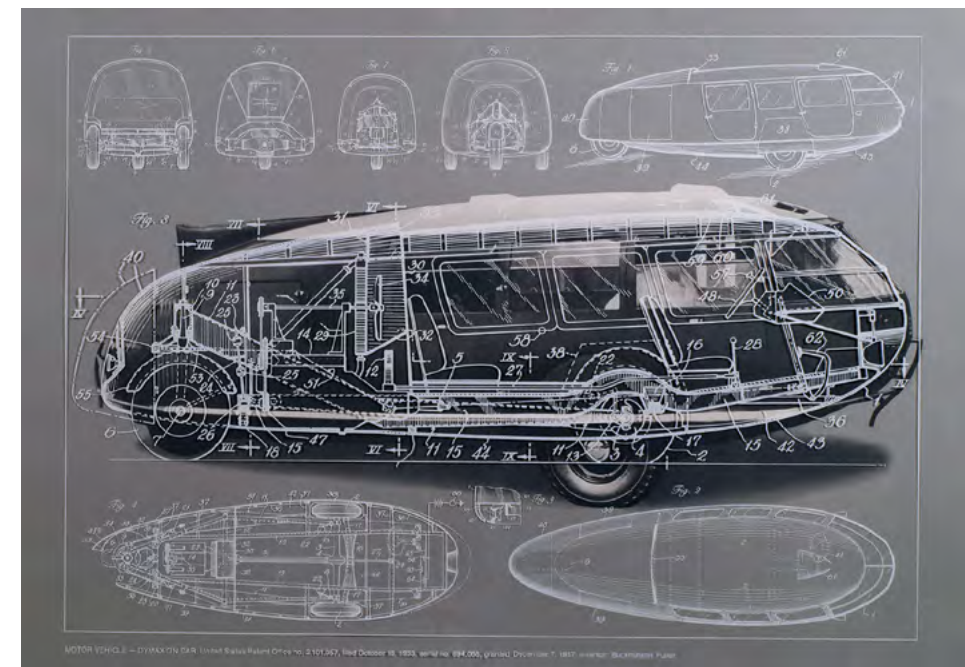
フロリダ州では1982年にデイズニーパーク「エプコット・センター」が開園したが、このパークの宇宙船地球号パビリオンというジオデシック

ク・ドームは、ウォルト・デイズニーが描いた未来ユートピア都市の理想的なシンボルとなった。今日、このドームには量産型の住宅を運ぶ空飛ぶクルマは見られないものの、洞窟時代から近未来に至るまでの人類のコミュニケーションの歴史をたどる場所になっている。

ジオデシック・ドームで生活しようという試みは、米国では1960年代にコロラド州南部のドロップ・シティを筆頭に、いわゆるオルタナティブな共同体において始まった。しかし、適切な機能を果たし得るジオデシック・ドームは、そのキット価格も高額だった。構造も複雑であり、ヒッピーたちが宿営のためにすぐに使えるようなものではない。また、分割が難しいこの構造物は、モンタナ州やメイン州の住宅というよりも、SF映画のセットのように見え、バックミンスター・フラー夫妻は別としても、このアイデアに飛びつく住宅バイヤーは少なかった。

常に楽天的なフラーは「私はただ発明し、発明したものを人類が必要とするまで、待つているだけだ」と話していた。リチャード・バックミンスター・フラーが、今日の私たちに提示しているものは、単に丈夫な軽量ドームや、プレハブ住宅の夢、空飛ぶ流線型のクルマではなく、喜びに満ちた発明に支えられながら、人類の啓蒙と進歩をどこまでも信じていくという態度ではなからうか。

「パテックフィリップマガジン・エクストラ」(patek.com/owners)にて、この記事の特別関連コンテンツを閲覧いただけます。



フラー(上)は、安定性がよく、簡単に折りたたみができるジオデシック・ドームを設計した。建築構造の改良に20年を費やし、1967年のモントリオール万国博覧会のパビリオン(左端)で後の「バイオスフィア」を披露した。巨大なスペースを包括し、内部には7階建ての建物が収まった。(左)1933年のダイマクション・カーの構造図。ボートの方向舵のように、1輪の後輪で操舵する仕組みになっていた。